

万葉論

1章 第一巻

九州天皇家終焉への鎮魂歌

九州天皇家終焉の鎮魂歌

万葉集編纂の特異性

雑歌によって編纂

万葉集第一巻は雑歌で編纂されている。雑歌とは何か。第二巻が相聞、挽歌で編纂されていることから考えると、雑歌とは相聞、挽歌でない歌である。しかし、万葉編者は、なぜ、第一巻を雑歌をもって編纂したのであろうか。

延喜五年（905年）四月十八日、古今和歌集が奏上された。古今和歌集は、巻頭の「仮名序」によれば、醍醐天皇の勅命により、万葉集に選ばれなかった古い時代の歌から撰者たちの時代までの和歌を撰んで編纂したと云われる。撰者は紀貫之、紀友則、壬生忠岑、凡河内躬恒の四人で、その編集形式は明快である。

仮名序

巻第一 春歌 上
巻第二 春歌 下
巻第三 夏歌
巻第四 秋歌 上
巻第五 秋歌 下
巻第六 冬歌
巻第七 賀歌
巻第八 離別歌
巻第九 羈旅歌
巻第十 物名
巻第十一 恋歌 一
巻第十二 恋歌 二

巻第十三 恋歌 三
巻第十四 恋歌 四
巻第十五 恋歌 五
巻第十六 哀傷歌
巻第十七 雑歌 上
巻第十八 雑歌 下
巻第十九 雑体（長歌・旋頭歌・誹諧歌）
巻第二十 大歌所御歌・神遊びの歌・東歌
曇滅歌
真名序

古今集に編纂された歌は日本の四季、正月、離別、羈旅、恋、哀傷の歌に分類されている。その分類に入らない歌が雑歌である。雑歌の意味は明確である。歌をこのように分類して収録するというのが、普通の編纂方法であろう。万葉集第一巻が雑歌によって編纂されているのは尋常ではない。

天皇の代に分類して編纂

万葉集第一巻は雑歌として84首が収録されている。だが、その編纂形式は天皇の代に沿っている。第一巻の雑歌84首は、次の天皇の代の歌である。

泊瀬浅倉宮に天の下知らしめしし天皇の代
高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇の代

一首
五首

明日香川原宮に天の下知らしめしし天皇の代	一首
後岡本宮に天の下知らしめしし天皇の代	八首
近江大津宮に天の下知らしめしし天皇の代	六首
明日香清御原宮に天の下知らしめしし天皇の代	六首
藤原宮に天の下知らしめしし天皇の代	五五首
(元明天皇の代)	八首

84首の雑歌は8人の天皇の代に編集されている。歌集として考えれば、このような編集は尋常ではない。万葉編者は古今和歌集編者のように、歌の内容に沿った編集形式を選ばず、天皇の代に沿った編集形式を採った。万葉集は、歌の内容に重きを置いたというより、天皇の代に重きを置いて編纂されたかのように見える。もっとはっきり言えば、万葉集は「歌による歴史書」として編纂された歌集であるといえる。編纂者は「天皇の代」をその代に歌われた「歌」で叙述した。歌と天皇の代は深く結び付く。万葉編者の編集目的は何だったのであろうか。

泊瀬朝倉天皇の御代、やまとの國の歌

泊瀬朝倉宮に天の下知らしめしし天皇の代
天皇の御製歌

籠もよ み籠持ち 堀串もよ み堀串持ち この岳に 菜摘ます兒 家聞かな 告らさね
山跡の國は おしなべて われこそ居れ しきなべて われこそ座せ われこそは 告らめ
家をも名をも

籠を、良い籠を持って、堀串を、良い堀串を持って、この丘で菜を摘む乙女よ。あなたの家はどこか聞きますよ。教えなさい。山跡の國はおしなべて私が治めている。どこもすべて私が統治している。私に教えなさい。あなたの家を、あなたの名前を。

泊瀬朝倉宮に天の下知らしめしし天皇とは雄略天皇と云われる。「雄略」とは降った世の諡だから万葉集題詞には雄略天皇と書いているわけではない。万葉題詞では「泊瀬朝倉宮の天皇」である。古事記では「大長谷若建命、長谷の朝倉宮に坐しまして、天の下治らしめしき。」と書かれている。古事記「大長谷若建命」と万葉集「泊瀬朝倉宮の天皇」とは同一人物と考えてよい。「泊瀬」・「長谷」は奈良の地名であるが、「泊瀬」がどこか、後の問題として、先に進もう。

万葉集栄光の一番歌は泊瀬朝倉宮天皇の歌である。この歌は内容から見れば求愛の歌である。雑歌というより、相聞というほうがふさわしい。なぜ、この歌が万葉集第一巻第一首として取り上げられたのであろうか。この歌だけでは判断できない。だが、二番歌と合わせて見ると、解明のヒントが浮かび上がってくる。万葉集の二番歌は、「高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇」の歌である。

高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇の代

天皇、香具山に登りて望國したまひふ時の御製歌

山常には 群山ありと とりよろふ 天乃香具山 登り立ち 國見をすれば 國原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし國ぞ あきつ島 八間跡の國は

山常には名高い群山がある。とり寄っている天の香具山に登り立って國見をすれば、國の村々には煙が立ち上り、海原には鷗が飛び回っている。美しい國ぞ、あきつ嶋、八間跡の國は。

二番歌は高市岡本宮の天皇の國見の歌である。「とりよろふ」が古来難解でその意味はいまだ定まっていない。その理由は「天の香具山は奈良の香具山だ」と断定しているからである。「とりよろふ」を原義のまま解釈すると、「とり」は接頭語、「よろふ」は「寄る」である。つまり「集

まっている山である天の香具山」という意味である。しかし奈良香具山は「とりよろふ」山ではない。単独の山である。これでは「とりよろふ」の意味が定まらないのは当然である。

「とりよろふ」天の香具山がどこ山か、この問いには後で答えるとして、万葉集（第一巻・第二巻）の編者が、第一首に泊瀬朝倉宮天皇の求愛の歌を取り上げ、第二首に高市岡本宮天皇の國見の歌を取り上げた理由は何であろうか。

古事記は神武天皇を初め多くの天皇、皇子、皇女の歌によって生き生きと彩られている。だから、神武天皇から雄略天皇までの天皇に歌がなかったわけではない。また、雄略天皇から高市岡本宮の天皇まで、各天皇が歌を詠わなかったのでもない。全ての天皇が歌を詠ってきた。にもかかわらず、万葉編者が第一首に泊瀬朝倉宮天皇の歌を、第二首に高市岡本宮天皇の歌を掲載した理由はどこにあったのか。

それは「やまと」にある。泊瀬朝倉宮天皇が「山跡」と詠い、高市岡本宮天皇が「山常」「八間跡」と詠っているからである。ここに万葉編者の編集意図を読み取ることができる。

泊瀬朝倉宮（雄略）天皇は「山跡の國」の統治を誇らしく詠い、高市岡本宮天皇は「八間跡はうまし國ぞ」と國を讃えている。万葉集が編纂された八世紀は日本が律令国家として完成していった時期と重なる。従って万葉編者が「やまと」の歌を冒頭に取り上げた理由を次のように考えることもできるであろう。

泊瀬朝倉宮（雄略）天皇は誇らしく、倭（やまと）の統治を歌っている。高市岡本宮天皇も誇らしく、倭（やまと）の國見を歌っている。我々もまた、律令国家の建設を祝福しようではないか。

万葉編者は山跡賛歌、山常賛歌として万葉集を編纂したのだ。万葉集冒頭の第一首、第二首から判断すると、万葉編纂意図をこのように理解することもできる。

奈良の香具山からは海が見えない

だが、万葉二番歌の「山常」が奈良「やまと」だと、解するには、高市岡本宮天皇の歌は大きな難点を抱える。小中学生から、「奈良の香具山から海が見えたのですか」と、尋ねられたら、たちまち答えに窮する歌なのである。奈良の香具山からは海は見えない。誰でも分かる事実である。従って、その難点をカバーする説が存在する。

- * 高市岡本宮の天皇とは舒明天皇である。詠われた海は喩えである。舒明天皇は池を海に喩えた。あるいは、池をみて海を連想した。海は実景ではない。観念だ。「鳴」はカモメではない。池に遊ぶ水鳥の一種だ。（山本健吉氏）
- * 大和平野の広潤な景観が、まさに見おろされた世界として、眼前にひらけてくる。よく自然の広がりと動きとに迫り、自然が目覚めたように炊煙が立ちに立ち、白い水鳥たちの舞いたつさまを彷彿たらしめる。「海原」は、今は涸れたけど、香具山の麓にあった埴安の池をさす。（西郷信綱「万葉私記」）

岡本宮天皇は國を見、海原を見た。その視線はるか遠くまで達している。歌の内的実証はそういつている。だが、奈良は山に囲まれた盆地である。香具山の山頂からの視線は周囲を取り巻く高い山々に遮られる。池は小さな池に過ぎないし、奈良香具山からの眺望はとても「広潤な景観」というわけにはいかない。西郷は「作者の幻想や希求の生みだした形象であった」と想像力の結果であると解説している（万葉私記）が、それはまちがいである。岡本天皇は想像力によって國見をしたのではない。歌は國見の実景である。國見とは王権の主張、この國は我が統治する國であることを内外に主張する王者の行為である。想像の世界ではなく、現実の統治世界を歌ったものである。岡本宮天皇は「やまと」の國の天皇である。岡本宮天皇支配の「やまと」は「天の香具山」から海まで続く國だ。万葉二番歌はこの現実を表明している。

奈良の香具山から海は見えないが、岡本天皇統治の「やまと」の國の「天の香具山」からは海が見えたんだよ。

この問題に答えようとしたのは古田武彦氏である。

* 高市岡本宮の天皇とは舒明天皇であるが、詠われた「八間跡の國」とは奈良大和ではない。奈良の香具山から海は見えない。「八間跡」とは奈良ではなく、地方の国だ。名は「やまと」ではなく「八間跡（ハマト）」だ。従って、作歌者は舒明天皇（高市岡本宮の天皇）ではない。地方国家の王者だ。万葉編者はその歌を盗用、舒明が歌ったと偽ったのだ。（古田武彦氏）

「作歌者は地方の王」という「盗用説」は飛躍した仮定であるが、歌の内的実証性を重んずれば、「ヤマトは奈良ではない」という古田のような考説もあり得るであろう。古田の説は国文学者、万葉学者の従来解説に満足できない人々に結構支持されている。多くの国文学者が解説するように、高市岡本宮天皇が「奈良の香具山」で歌ったという解釈に立てば、「海」は池となり、「カモメ」は水鳥と矮小化される。古田のように、「海が見えた」という実証性尊重の立場に立てば、「八間跡」の國は「ハマト」と別国となり、作歌者は海が見える「ハマト」の國の王と別人仕立てとなる。だが「八間跡」は「ハマト」と訓めるかも知れないが「山棠」は「ヤマト」としか訓めない。古田の説では岡本宮天皇は「ヤマト」と「ハマト」の二つの國を国見したのかという疑問が新たに生じる。「ハマト」の國という古田の仮説は無理であろう。

これら二つの従来解説は歌詞を勝手に曲げて解釈するか、または作歌者を勝手に別人に仕立てている「曲説」であることに変わりはない。こうした「曲説」に立たなければ、高市岡本宮天皇の歌は理性的に解釈できない不可解さをもつ。その理由は万葉二番歌の高市岡本宮天皇が日本書紀の舒明天皇と同一人物であるという歴史認識に立っていることにある。

高市岡本宮天皇とは舒明天皇である。舒明天皇は奈良の天皇である。従って「天の香具山」とは奈良香具山である。舒明天皇が「天の香具山」から國見をした「八間跡・山棠（やまと）」とは奈良である。

私たちはこのような歴史認識に立って高市岡本宮天皇の歌を理解している。だが、この理解に立てば、高市岡本宮天皇の歌はどこかを曲げて読まない通常理性では、納得できない歌となる。それは誰にも否定しようがない。ここには二重の問いが生じている。「高市岡本宮の天皇とは奈良舒明天皇なのか。」「高市岡本宮天皇が國見をした「八間跡」、「山棠」とは奈良に存在したヤマトなのか。」

確かに、雄略の歌にはその判断材料はない。しかし、高市岡本宮天皇の歌には明確な判断材料がある。高市岡本宮天皇は山頂から海を見たという。高市岡本宮天皇の國「山棠（やまと）」が奈良に実在した国家というのなら、高市岡本宮天皇は奈良天の香具山から海を見たのだろうか。見えたはずはない。では、高市岡本宮天皇が見たと詠った海は幻だったのか。だが、逆も言えよう。高市岡本宮天皇が見たと詠った海が現実であるならば、「山棠」の國が奈良に実在したというあなたの歴史認識の方が幻ではないのか。

海が見える天の香具山は香春一ノ岳

高市岡本宮天皇の歌を一切曲げずに、歌のままに読んでみよう。高市岡本宮天皇は舒明天皇であるという歴史認識に依らず、歌の内的実証を尊重して歌のままに読んでみよう。

- (1) 高市岡本宮天皇は「山棠」の天の香具山に登って國見をした。高市岡本宮天皇の國の果ては海だった。高市岡本宮天皇はその海を見た。
- (2) 「山棠」とは「やまと」である。「八間跡」も「やまと」である。ただ漢字表記を変えただけで國が異なるわけではない。歌に二つの國が詠われているのではなく、「山棠」と「八間跡」は同じ「やまと」の國である。古田のように「八間跡」を「ハマト」と訓んではならない。
- (3) 高市岡本宮天皇は「山棠（やまと）」の國の天皇である。高市岡本宮天皇は「山棠（やまと）」

の國の天皇として、海が見える「天の香具山」に登り、「山常（やまと）」の國を見た。

この読みが何も変更しない、どこも曲げないありのままの読みである。この読みの結論は次のようになる。歌の内的実証を尊重すれば次のように解するほかはない。

- (1) 高市岡本宮天皇とは奈良の天皇ではない。なぜなら、奈良の香具山から海は見えない。
- (2) 高市岡本宮天皇が統治した國「山常（やまと）」とは奈良「やまと」ではない。

高市岡本宮天皇の歌を歌のままに読めば、万葉編者が高市岡本宮天皇の歌に託したメッセージを読みとることができる。

高市岡本宮天皇の國「山常（やまと）」には天の香具山があった。その香具山からは海が見えた。岡本宮天皇が統治された國「山常（やまと）」とは奈良ではない。泊瀬朝倉宮天皇、高市岡本宮天皇が統治された國「倭（やまと）」は海が見える香具山が存在する國だった。その國は日本書紀舒明が統治した奈良とは異なる國である。

では、「山常（やまと）」が奈良でないとする「やまと」はどこに存在したのか。万葉編者はそのことについて黙っていたわけではない。万葉編者と同時代の持統朝、文武朝の人々にとっては「やまと」が奈良でないことは自明だったし、「高市岡本宮天皇」が奈良の天皇でないこともまた自明だった。今の私たちが「高市岡本宮天皇は舒明天皇」と誤解し、「やまとは奈良」と誤読しているだけのことである。奈良の香具山とは異なる「天の香具山」と呼ばれる名山がもう一つ存在したのである。そしてそこには奈良の天皇家とは異なるもう一つの天皇家が存在した。その天皇家の天皇の一人が「高市岡本宮天皇」だったのである。では高市岡本宮天皇はどの國の天皇だったのか。分かりやすくするために「天の香具山」と讃えられた名山を特定しよう。「天の香具山」とはどの山か。福岡県香春町の香春一ノ岳である。「とりよろふ天乃香具山」とは盆地の中に五〇〇メートル級の山が三つ寄り添っている連山の姿を描写したものである。香春岳はまさに寄りそっている。香春一ノ岳の山頂から海が見えた。その海とは周防灘である。



高市岡本宮天皇は香春岳に登り、眼下の香春町・田川市の民家から立ち上る煙を見て、「國原は煙立ち立つ」と詠い、東の周防灘を見て、「海原は鳴立ち立つ」と詠った。高市岡本宮天皇は香春岳山頂から見える生き生きとした実景を詠んだのである。これこそ西郷の言う「広潤な景観」であろう。では、私たちも、この天皇の國見を追体験することができるか。むろん可能である。天の香具山が残っていればである。だが、残念ながら、今、「天の香具山」から國見をすること

はできない。数々の歌に詠われたこの名山は、上半分を削り取られ、悲しいばかりの無残な姿となっている。天の香具山（香春一ノ岳）の替わりに大坂山から見てみよう。

行橋市街、周防灘が見える。高市岡本宮天皇も國の人々もこのように、天の香具山の山頂から海（周防灘）を見たのである。

高市岡本宮の天皇は香春一の岳に登って國見をした。では高市岡本宮天皇とは一体誰なのか。なぜ天皇と言われているのか。なぜ香春町が「ヤマト」と呼ばれたのか。これらの説明が万葉集という歌集の本質を明らかにする。



大坂山から周防灘を見る

<http://www4.plala.or.jp/nonbiri-kyushu/Nonbiri/path/oosakayama/oosakayama.htm>

「山常」「八間跡」の國は九州天皇家の「やまと」

高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇は香春一ノ岳に登って國見の歌を歌った。香春一ノ岳から見える國が「山常」「八間跡」である。「山常」「八間跡」とは香春町、田川市、そして行橋市である。なぜ福岡県のこれらの國が「やまと」と詠われたのか。万葉編者が試みた「天皇の代と歌」という編纂方式が全く新たな歴史認識を切り開くことになる。天皇家は奈良に存在しただけではない。もう一つの天皇家が九州に存在したのである。

その始祖が神武である。神武東征についての従来の歴史認識はまちがいである。神武が長い東征の果てに都を定めた国とは奈良ではない。福岡県香春町・田川市である。神武東征とは明治以降信じられてきた宮崎から奈良への遠征ではない。神武東征とは門司区吉志での緒戦敗退から小倉南区の長野城における熊襲兄弟との戦闘、行橋市の豪族との戦闘、みやこ町犀川を遡って香春への侵入であった。造船して東征に出発した「吉備」とは岡山吉備ではなく、下関市彦島に存在した古代「吉備」である。神武東征とは九州東北部での遠征であった。

都を定めた時の神武の言葉が古事記に残る。

観れば、夫（か）の畝傍山東南の檀原の地は、蓋し國の壤區か。治るべし。（古事記神武）

神武が「畝傍山」と呼んだ山とは「香春岳」である。確かに香春岳は畑の畝の形をしている。奈良の畝傍山を見て畑の畝を連想する人はまずいまい。神武はこの香春岳の東南の地に亲宅をつくり、統治を宣言した。

文飾があるものの、ここには神武が宮を建築した場所が「畝傍山東南の檀原の地」と明示されている。古事記「檀原の地」とは現代地図でいえば「香春町高野」である。古事記の記録が真実で信頼するに値するものであれば、「高野」に神武邸宅の跡が残っているはずである。神武が宮を建築したのは2000年余前であるが、日本書紀天武天皇の中に神武の宮の記事が現れるのを見ると、8世紀にはまだ残っていたのである。果たして今なお神武檀原宮址が「高野」に存在するか。

神武は弥生人である。当時神武は「香春町高野」のどこに邸宅を建てたのであろうか。どんな規模だったのか。家臣をどこに住ませたのか。生活水はどう確保したのか等々、興味は尽きない。2016年、私は3人の友人と共に、古事記を頼りに香春町高野を訪れた。香春町高野の集落の坂道を登り切った所に古い神社がある。現在の名前は貴船神社である。この神社の建つ場所はまるで環濠集落のように細く深い川が半周流れ、背後は切り立った山である。敵が攻めるとしたら下方一カ所だけという防御上絶好の地形である。弥生時代、敵地の真ん中に侵入した神武が邸宅を構えるに当たって防御第一としたことは当然で、この地は誠に相応しい。敷地面積はそう広がらないが、それは私たち現代人の感覚で、当時としては十分な広さであろう。この地から正面に香春岳が見える。ここが2000年間、誰にも邪魔されず眠っていた神武檀原宮の跡地である。

神武檀原宮の香春町高野実在は神武香春町建国を実証する。しかし、これだけでは神武東征が九州東北部であったという史実をにわかに信じることができないという方も多いであろう。詳しくはHP「九州天皇家論・第8章真実を伝える日本書紀神武説話」をご覧ください。ここに一つだけ追加しておこう。神武は東征の成功の後、新たな皇后を迎えた。その皇后は「狭井河」の豪族の娘だった。「狭井河」とはみやこ町犀川である。この皇后の墓も香春町には伝わる。



神武とその後継は香春・田川を「やまと」と呼び統治した。「やまと」とは「山戸」であろう。神武の祖先たちが築いた國（弥生集落）は水辺に存在した。故に「大八洲」と呼ばれたのである。「大八洲」は港町（水戸）だった。ところが神武が啓いた國は山間の香春町にあった。故に「やまと」と呼んだのである。「やまと」には格別な意味はない。

ここに神武を始祖とする一つの天皇家が始まる。この天皇家を奈良に存在した天皇家と区別するために、「九州天皇家」と呼んでいくことにする。万葉二番歌國見の歌を詠った高市岡本宮天皇は九州天皇家の天皇である。高市岡本宮天皇が「山常」「八間跡」と歌った國は神武が啓いた「やまと」の國、香春町、田川市である。そして山頂から見えた海とは周防灘である。

なお古事記では「倭」と書いて「やまと」と訓んでいる。「倭」は「やまと」とは訓めない。「倭」は「キ」で、「倭（キ）」とは元々九州を支配した王「倭（キ）」の名に由来するものである。「倭（キ）」は正しくは「姫」で、「姫」とは「姫氏」である。「姫氏」は紀元前5世紀弥生文明を日本列島に持ち込んだ中国春秋時代「呉」の王家一族である。彼らが建国した國は「姫國（倭國）」と総称される。神武が侵入した「倭國」もその一つだった。だが、神武の時代、香春の「倭國」を支配していたのはもはや「姫氏」ではなく、「姫氏」に遅れること200年余、日本列島に渡ってきた中国「楚」の王家一族の「熊氏」であった。この「熊氏」の王「タケル」との覇権争いが神武東征の歴史である。

万葉集の「泊瀬」「高市岡本」の天皇は九州天皇家の天皇である

再び、万葉集に戻ろう。では、万葉集第一首、泊瀬朝倉宮に天の下知らしめしし天皇が詠った「山跡」の國とはどこか。当然、第二首で詠われた「山常」「八間跡」と同じ國、九州天皇家の「やまと」である。万葉集一番歌を歌った泊瀬朝倉宮の天皇も九州天皇家の天皇である。その宮があった「泊瀬朝倉」とは現在の朝倉市秋月である。秋月は美しい町である。「朝倉」は「朝倉市」の名前となり、「泊瀬」は秋月の「長谷」の地名として残っている。

九州天皇家の「泊瀬朝倉宮」天皇は「やまと」の統治を詠い、九州天皇家の高市岡本宮天皇は海が見える九州天皇家の「天の香具山（香春岳）」に登り、九州天皇家の「やまと」の國見を詠った。

万葉編者は栄光の第一首、第二首に九州天皇家の二人の天皇の「やまと」の歌を選んだ。この二つの歌によって、九州天皇家の始祖、神武建国「やまとの國」は奈良ではなく、香春町・田川市であることを明示したのである。

日本書紀舒明天皇は日本國の天皇である

万葉集二番歌を詠った高市岡本宮天皇は日本書紀舒明天皇と同一人物と誤解されているが、舒明ではない。舒明天皇については日本書紀によるしかないが、舒明紀に書かれている記事は九州の記事ではない。舒明紀の大半を占める蘇我氏と山背大兄の権力闘争の舞台は、どう読んでも、奈良・大阪である。日本書紀の舒明天皇が即位したあとの記事を読んでみよう。

舒明四年冬10月の辛亥の朔甲寅（4日）に、唐国の使人高表仁等、難波津に泊れり。則ち大伴連馬養を遣して、江口に迎へしむ。船三十二艘及び・鼓・吹・旗幟、皆具に整飾へり。便ち高表仁等に告げて曰はく、「天子の命のたまへる使、天皇の朝に到れりと聞きて迎へしむ」といふ。時に高表仁対へて曰さく、「風寒じき日に、船艘を飾整ひて、迎へ賜ふこと、歎び愧る」とまうす。是に、難波吉士小槻・大河内直矢伏に令して、導者として館の前に到らしむ。乃ち伊岐史乙等・難波吉士八牛を遣して、客等を引て館に入らしむ。即日
に神酒を給ふ。
（日本書紀舒明）

舒明4年冬10月に唐の大使を迎えた時の様子である。唐の大使を江口で迎え迎賓館に案内したと書いている。「江口」とは今に地名が残る大阪市東淀川区の江口である。このように舒明紀の舞台は関西である。日本書紀舒明天皇は奈良に都を置いていた日本國天皇家の天皇で、この舒

明が九州香春町に出かけ、香春一ノ岳に登り、國見の歌を詠ったのではない。

万葉歌は九州天皇家の歌

万葉編者は九州天皇家の代に分別して倭歌を編纂した。特異な編纂方法といえるが、万葉編者は日本書紀の天皇紀に対置して倭歌による九州天皇紀を作成したといえるかもしれない。

倭歌による九州天皇紀として編纂された万葉集は日本書紀が描かなかった九州天皇家存在という歴史真実を伝えた。従って天皇の代と万葉歌は深く結ばれている。万葉集第一巻、第二巻は題詞が重要な意味を持つ。題詞と歌を切り離して読んではならない。

高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇の代を五首の歌で伝えよう。高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇は天の香具山に登り、國見の歌を歌った。この歌を読めば高市岡本宮の天皇の世界を見ることができる。高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇がお登りになった天の香具山は奈良の香具山ではない。九州天皇家の天の香具山である。この歌をお作りになった高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇は九州天皇家の天皇である。私は九州天皇家の御代の歌を編纂した。万葉（万代）とは九州天皇家の代である。

万葉編者は倭歌による九州天皇紀という思いがけない発想で万葉集を作った。その際、彼は歌の善し悪しとか、作歌者が専門歌人であるか素人であるか等を選択の基準としなかった。正岡子規が万葉歌人を「歌の道のしろうと」と酷評したのも当然である。万葉第一巻、第二巻の編者は九州天皇家の存在とその世界を伝えることができる歌を集めて編纂した。故に、歌は雑歌となり、その歌は九州天皇家の代に沿って編集された。

天武の代、壬申の乱の歌

天武天皇の歌、「耳我の嶺」は企救半島の山

万葉集は九州天皇家の歌集である。もう一つ、天武の代の歌を取り上げてみよう。天武の壬申の乱は奈良吉野に始まったとするのが通説である。これもとんでもない誤解である。万葉歌が異なる真実を伝えている。日本書紀は壬申の乱の前夜、大海人皇子（天武）が天智天皇に、「陛下の為に、功德を修はむ」と云って、吉野に出家したと伝える。史実であるが、誤解が生じる書き方である。

癸未（10月20日）至吉野に至りて居します。是の時に、諸の舍人を聚へて、謂りて曰はく、「我今入道儉行せむとす。故、随ひて修道せむと欲ふ者は留れ。若し仕へて名を成さむと欲ふ者は、遷りて司に仕へよ」とのたまふ。然るに退く者無し。更に舍人を聚へて、詔すること前の如し。是を以て、舍人等半は留り半は退るぬ。
(日本書紀天武天皇上)

日本書紀は天武がどこで、どうしたか、分かるような具体名を書いていない。「吉野に至りて」と書くが、一体吉野のどこか、不明である。むろん天武は吉野の「吉野の宮」で「儉行」しようとしたのではない。では、吉野のどこで「儉行」しようとしたのか。日本書紀は明らかにせず、ぼかしている。そこで、万葉編者は日本書紀があいまいにした要点を、天武自身の歌でもって明らかにした。天武が「我今入道儉行せむとす」としたのは「山」である。その山の名は「耳我嶺」である。天武はこの山に登った。その時の不安を歌にしている。

明日香清御原宮天皇の代

万葉集26番歌 天皇の御製歌

み吉野の 耳我の嶺に 時なくぞ 雪は降りける 間なくぞ 雨は降りける その雪の 時なきがごと その雨が 間なきがごと 隈もおちず 思ひつつ来し その山道を

この歌の諸注釈もいくつかあるようである。

恋をうたったとする説と、「思ひつつぞ来し」の「思ひ」はこの際もっと他の感情をあらわしているのではないかとする説とある。略解のように、山道の好景を賞する意にとるものもあり、たとえば茂吉・文明篇『万葉集研究』では、右の諸説がそれぞれ雑然と主張されている。そういうなかであって、もっとも決然とその「思ひ」の何であるかを歴史的に指摘しようとしたのは、守部の檜嬬手が最初である。すなわち彼は、天智貴十年冬十月の「庚辰、天皇病おもし。勅して東宮（大海人皇子＝天武）を召して、臥内に引き入れて、詔して曰く、朕病おもし。後事を以て汝に属く云々。是に於いて再拜みて疾と称して、固辞もうして受けずして曰く、讀ふ洪業を拳げて大后に付属けまつり、大友王をして諸政を宣はしめ奉らむ。臣讀願ふ、天皇のおんために出家して修道はむ。天皇許したまふ。・・・壬午、東宮天皇に見えて、吉野にまで仏道を修行はむと讀ふ。天皇許したまふ。東宮即ち吉野に入りたまふ。」という記事を引用し、「此時の御道すがらの御歌とぞきこえたる」といい、壬申の乱の「御陰謀」につきての「思ひ」と解している。後述するように私もこの作の心を恋とするに反対なのであるが、しかし守部説はいささか強引であり、史的状況の設定はこれでいいにしても、作品のとらえかたが充分でない。
(万葉私記 西郷信綱)

万葉編者が天武のこの歌を取り上げた意図は何であろうか。天武の歌は「恋歌」ではないが、「陰謀」を思い悩んだという「史的状況の設定」は当たっている。だがそれだけではない。天武天皇は天皇家の絶対存在である。天皇家のいかなる人間も天武の歌の一字一句に修正を加えることはできない。故に万葉編者はこの歌を万葉集の「天武の代」に収録した。万葉編者のメッセージは鮮烈である。

天武天皇は「吉野の耳我の嶺」に登って、儉行したと歌っておられる。

現在、奈良吉野で、「耳我の嶺」はどの山か特定できていない。万葉の研究者は、この山がどの山か研究を避けているように見える。なぜなら特定できないからである。特定できないのは当然である。奈良吉野にこの山は存在しない。天武天皇は奈良の山に登ったのではない。

「耳我の嶺」とは、山の姿が耳の形をしている故の名前である。だが、耳は耳でも人の耳ではない。獣の耳である。この山はピンと立った獣の耳の形をしている。故に、「耳我の嶺」と呼ばれた。「耳我の嶺」は九州天皇家の名山である。その山は企救半島に実在する。現在の名前は妙見山である。

妙見山は古来、修験道の山として有名である。天武はこの山で修行しようとした。従って、誰が奈良吉野に行っても、「耳我の嶺」という名前にふさわしい耳の形をした山を見つけることはできない。

万葉編者が、天武の代に、天武の「耳我の嶺」の歌を収録した真意は明らかであろう。この歌には天武が登った山が「耳我の嶺」と具体的にはっきりと詠われている。この山の名前は、一度聞いたら忘れられないような特異な名前である。天武朝の人々はよく知っていた山であろう。もちろん、どこに存在していたか知っていた。

日本書紀天武天皇（上）では壬申の乱が奈良吉野で勃発したとは書かれていない。そのように読んでいるのは私たちである。天武紀の編者は「吉野」が奈良吉野だと書いてはいない。しかし、また、「吉野」が九州天皇家の「吉野」、小倉南区だったとも明記しなかった。

だが、日本書紀が編纂され広く読まれるようになった八世紀末には、壬申の乱の「吉野」はもはやどこに存在したか分からないようになっていたのかもしれない。当時、「吉野」と言えば、現在の私たちのように、奈良「吉野」しか人々は知らなかったのであろう。しかし、そうではないのだ。壬申の乱は奈良「吉野」ではない。九州天皇家の「吉野」だ。天武は九州天皇家吉野の「耳我の嶺」に登ったのだ。

万葉編者は天武自身の「耳我の嶺」の歌を対置して、天武の所在を明確にしたのである。

天武天皇は耳我の嶺に登ったと詠われておられる。これは天武天皇ご自身の歌である。絶対である。もし壬申の乱前夜、天武天皇が奈良吉野の山にお登りになったというのならそれは一体どの山をいうのだ。奈良に天武天皇がお登りになった耳我の嶺があるか。あるというのならそれはどの山だ。明らかにできるか。できるはずがない。耳我の嶺は奈良の山ではない。九州の山だ。天武天皇は北九州に居られたのだ。

万葉編者の問いかけは、日本書紀をいかに読んでいるかという、私たちへの問いかけでもある。万葉天武の「耳我」の歌は「天武天皇は奈良に生きた天皇である」という歴史常識を根底から覆す。天武は奈良の天皇家の天皇ではない。天武は九州天皇家の天皇である。泊瀬の天皇、高市岡本の天皇と同じく神武を始祖とする九州天皇家の天皇である。それ故、「耳我の嶺」という九州天皇家の聖なる山に登って、天皇天智の病氣回復を祈ったのだ。これが天武「耳我」の歌を編纂した万葉編者の意図である。この「吉野」とはどこか。奈良吉野ではない。



<http://members.jcom.home.ne.jp/eirakuan/12adatisiro.htm>

「耳我」の歌は天武が北九州にいたことを明らかにする

天武天皇のこの耳我の歌が、優れた歌だと評価できるかどうかは、意見の分かれるところであろう。もし、万葉編者が、純粹に文学的な意図で、万葉集を編纂したのであれば、天武天皇の代表的な歌として、この歌を取り上げたであろうか。耳我の歌は苦悩に満ちた歌である。偉大な天皇の代表歌として取り上げるには、あまりにも不安を吐露しすぎているように思われる。天武には天皇としての気品に満ちた歌が多くある。耳我の歌は天武の代表歌として取り上げるような歌ではないと思われる。

万葉編者は、文学的な目的だけで万葉集を編纂したのではないことは、この歌を取り上げたことを見ても明らかである。万葉編者はその歌が優れた歌だという理由で万葉集に収録したのではない。では、何故、万葉編者は耳我の歌を収録したのか。この歌が壬申の乱に関わる歌だったからである。詠われた実景はリアルである。詠われた感情はリアルである。天武の「耳我の歌」は、天武紀が記録しなかった真実を浮き上がらせる。天武紀の舞台は奈良ではない。天武紀の舞台を奈良と読んではいならない。その舞台は九州だ。万葉編者が天武の代に「耳我の歌」を収録したのは、壬申の乱を強く意識したからである。

耳我の嶺は奈良吉野にはない。耳我の嶺は九州企救半島に実在している。天武天皇は九州のこの山にお登りになった。そして歴史は壬申の乱へと急展開していった。壬申の乱の戦場は北九州だった。

天武の歌はこの真実を明らかにする。万葉集天武の「耳我の嶺」の解説は日本書紀天武天皇の再検討を私たちに迫る。天武紀は全て九州が舞台である。万葉編者は天武の歌一つで歴史の真実を提示してみせたのである。

吹刀自と麻績王の「伊勢」の歌

万葉集の天武の代の歌には、他にも不思議なことがある。歌の順序である。天武の「耳我の歌」は天武の代の一番目の歌ではない。天武の代に収録されている歌は6首ある。

明日香清御原宮天皇の代

- 十市皇女、伊勢の神宮に参赴りし時、波多の横山の巖を見て吹 刀自の作る歌
- 22 河上のゆつ岩群に草生さず常にもがもな常處女にて
麻績王の伊勢國の伊良虞の嶋に流さるる時、人、哀しび傷みて作る歌
- 23 打ち麻を麻統の王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります
麻績王、これを聞いて感傷して和ふる歌
- 24 うつせみの命を惜しみ浪に濡れ伊良虞の島の玉藻刈りをす
天皇御製歌
- 25 み吉野の 耳我の嶺に 時なくぞ 雪は降りける 間無くぞ 雨は降りける その雪の 時なき
がごと その雨の 間なきがごと 隈もおちず 思ひつつぞ来る その山道を
或る本の歌
- 26 み吉野の 耳我の山に 時じくぞ 雪は降るといふ 間なくぞ 雨は降るといふ その雪の 時
じきがごと その雨の 間なきがごと 隈もおちず 思ひつつぞ来る その山道を
天皇、吉野の宮に幸しし時の御製歌
- 27 淑き人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よ良き人よく見

「伊勢」は九州天皇家の「伊勢」

一番目の歌は、吹刀自の歌である。天武天皇と額田王の間に娘が生まれた。十市皇女である。吹刀自はその十市皇女が伊勢神宮に参拝した時のお供である。供の歌が天武の代の第一首である。第二首は伊勢の國に流された麻績王を傷んだ、或る人の歌である。第三首が麻績王の歌である。天武自身の歌はこれらの歌のあとに収録されている。この編纂の順序はどうか。これは尋常な編集ではない。尋常の編集ならば、天武の代の歌の第一首は天武の歌でなければならない。まず、天武の歌を数首収めて、それから、順次、天武の関係者の歌を収録していくというのが普通の歌集の編集方針であろう。

万葉編者は尋常ではない歌を、尋常ではない仕方で編集している。しかし、なぜ、万葉編者は天武の代の第一首に、吹刀自の歌、第二首、第三首に麻績王の流刑の歌を載せたのであろうか。編者は、作歌者に重点をおいて、これらの歌を収録したのではないことはあきらかである。2

3番歌では、作歌者は、ただ「人」と、書いているだけである。作歌者によって歌を選んだのではない。では、何を、選択の理由としたのか。この三首に共通していることがある。それは「伊勢」である。万葉編者はこれらの歌が、「伊勢」の歌だから天武の代の歌として選択したのである。では、何故、「伊勢」の歌を最初に載せたのか。天武の代には、数多くに歌が詠われたにちがいない。だが、他の歌をさしおいて、「伊勢」の歌を取り上げた真意は何か。

天武の代に伊勢と云えば、誰でもその脳裏に浮かぶ天武の言葉がある。「伊勢に逢へ」である。壬申の年に天武が蜂起を決意した時、重要な命令を下した。それが「伊勢に逢へ」だった。この命令は、天武が蜂起の拠点伊勢に置くという戦略を立てたことを意味した。全軍は伊勢に結集せよ。この言葉通り、天武は吉野から伊勢へ向かった。日本書紀編者は、天武の行動を伊勢國の鈴鹿郡、伊勢國の三重郡、伊勢國の朝明の郡、伊勢國の桑名郡へ進んだと書いている。此処までは問題ない。だが、不思議なのは桑名郡における天武の行動である。丁寧に読めばすぐ分かるが、日本書紀編者は、天武はこの桑名郡に留まり、ここから先に進まなかったと書いている。そして、そのあと、高市皇子の薦めに従って不破郡へ進んでいる。

この正確な乱の軍事記録を関西地図で見よう。すると、どうなるか。天武は「伊勢」に向かったはずなのに、三重県伊勢市には向かっていない。天武自ら、「伊勢に逢へ」と命令したにもかかわらず、三重県伊勢市には入っていないのである。天武は東の伊勢市に入ることなく、北東の桑名に進んでいる。確かに、そこも伊勢國の桑名だ。桑名は伊勢國の中の一つの郡だから、伊勢に向かったと云ってもいいではないか、と強弁できるかもしれない。しかし、同じ方向ならまだしも、桑名と伊勢では方向が違う。あなたは桑名に行って、「伊勢に行ってきたよ」と云いますか。その場合は、「桑名に行ってきたよ」と云うであろう。



関西地図で読むと、「伊勢に逢へ」と云ったにもかかわらず、天武自身は伊勢市に入らず、北東の桑名に向かっている。天武は伊勢市には足を踏み入れていない。これでは、「伊勢に逢え」と云った言葉が嘘となる。だが、日本書紀が嘘を書いたのではない。日本書紀が記録した天武の言葉も天武の行動も事実である。嘘と見えるのは、私たちの読みがまちがっているからである。私たちの読み方、つまり、現代関西地図で天武紀を読むという読み方がまちがっているのである。

関西地図で読むと、天武が「伊勢桑名に留まり、それより先には進まなかった」という日本書紀の記述が不可解となる。関西地図では、桑名から先に進まなければ、不破には到着しない。

これらの破綻は関西地図で壬申の乱を読むという読み方に起因する。ところが、日本書紀が作成された時、「伊勢」とはすでに三重県伊勢であった。だから、当時の人々は壬申の乱の伊勢を、私たちと同じように、三重県伊勢と誤読したのである。だが、壬申の乱の拠点となった伊勢は八世紀の近畿天皇家の三重県伊勢ではない。七世紀の九州天皇家の伊勢だ。万葉歌で歌われた伊勢が壬申の乱の伊勢だ。十市皇女が参拝した伊勢、麻績王が流された伊勢が七世紀、九州天皇家の伊勢だ。

天武天皇は九州天皇家の「伊勢」で蜂起した

万葉編者が伊勢の歌を編纂した目的が明らかとなろう。万葉編者は天武の代の歌の編集テーマを「壬申の乱」とした。天武は伊勢へ向かった。だが、この伊勢は持統天皇家の伊勢（三重県）ではない。天武が実際に向かった伊勢は九州天皇家に伊勢である。

吹刀自が伊勢参拝のときに処女の歌を詠んでいる。麻績王が伊勢に流され、海藻を食べて生き延びていることを傷んだ名前は公にはできないが、「ある人」の歌がある。これらの歌に詠まれた伊勢が壬申の乱の拠点となった伊勢だ。天武が「伊勢に逢へ」と命令し、そして自らが向かったのがこの伊勢だ。この伊勢が壬申の乱の伊勢だ。

この伊勢の歌を「天武の代」の歌として取り上げよう。そして壬申の乱の伊勢は「現代伊勢」ではなく「古代伊勢」であることを明らかにしよう。伊勢は持統天皇家の伊勢ではなく九州天皇家の伊勢だ。

万葉編者が明らかによつとした伊勢とは行橋市である。十市皇女と吹刀自が参拝した伊勢神宮は行橋市にあった。麻績王の流刑地伊良禰の島も行橋市にあった。

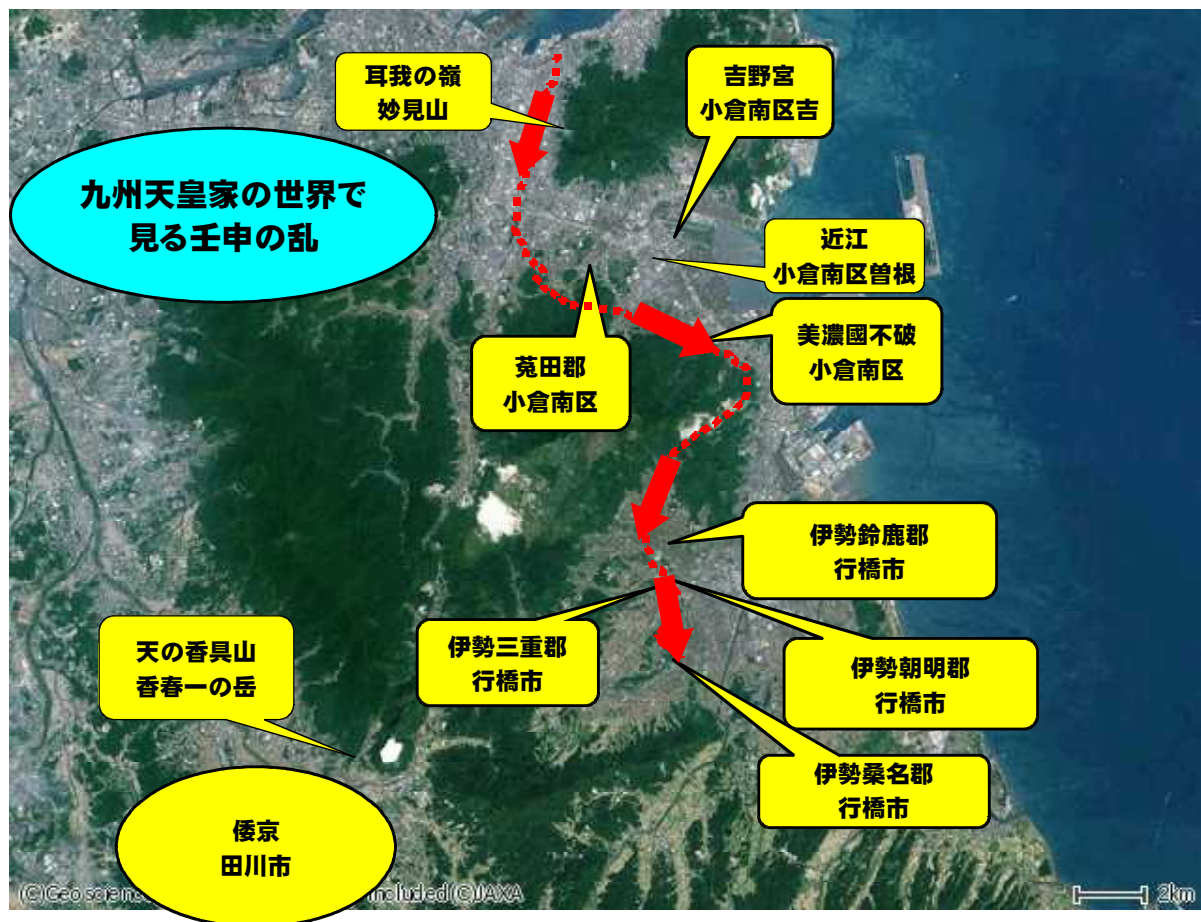
天武紀の壬申の乱は現代関西地図ではなく、九州天皇家の地図で読まなければならない。天武は「伊勢に逢へ」と命令した。そして天武は伊勢（行橋市）に向かった。小倉南区を徹夜で行進し、九州天皇家の伊勢國の鈴鹿郡、三重郡、朝明郡へと南下していった。そして、伊勢國の桑名郡まで来て、この郡で留まった。なぜなら九州天皇家の美濃國（苅田町）で高市皇子が不破道（苅田町）を塞いだ、という報せが届いたからである。もう追われる心配は無くなった。一晚、桑名郡驛家の屋根の下で休んだ天武は、高市皇子の進言を入れて不破郡（苅田町）までバックして、日本國朝廷軍と九州天皇家の近江（小倉南区）で対峙した。これが壬申の乱の始まりである。

壬申の乱において、天武が蜂起のため一目散にめざした伊勢國とは九州天皇家の伊勢國、つまり、行橋市である。伊勢國鈴鹿郡、伊勢國三重郡、伊勢國朝明郡、伊勢國桑名郡は全て九州天皇家の伊勢國（行橋市）に存在した郡だった。桑名郡はこれらの郡の中で一番南に存在した。天武は其処まで逃げて踏みとどまり、北上し反撃に出たのである。日本書紀編者は正確に九州天皇家伊勢における軍事行動を描いた。

だが、当時すでに九州天皇家の伊勢は存在しなかった。伊勢といえば三重県伊勢であった。人々は九州天皇家の「古代伊勢」を知らず、いわば「現代伊勢」しか知らなかった。人々の認識から九州天皇家の存在が消え去ろうとしている。

万葉編者は壬申の「伊勢」は九州天皇家の伊勢だ。天武紀の伊勢は現在の持統天皇家の伊勢ではなく、九州天皇家の伊勢（行橋市）だと訴えたのである。

万葉編者は天武の「耳我」の歌を二つも載せている。天武が亡くなってからまだそれほどの年月が経った訳ではない。にも関わらず、もう天武の時代が忘れられようとしている。今の世は天武の壬申の勝利があったからではないのか。蜂起に到る天武の苦悩はこの歌に込められている。その苦悩さえもはや知ろうとしないのか。このような怒りが歌の編纂には込められているように思える。



吉野の歌

天皇、吉野の宮に幸しし時の御製歌

27 淑き人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よ良き人よく見

天武天皇が吉野の宮に行幸した時の歌である。この吉野の宮は人麿が詠って有名である。人麿の歌は持統の代の歌であるが、吉野の宮を特定するために、ここで読んでみよう。

吉野の宮に幸しし時、柿本朝臣人麿の作る歌

36 やすみしし わご大君の 聞し食す 天の下に 國はしも 多にあれども 山川の 清き河内と
御心を 吉野の國の 花散らふ 秋津の野邊に 宮柱 太敷きませば 百磯城の 大宮人は 船
並めて 朝川渡り 舟競ひ 夕河渡る この川の 絶ゆることなく この山の いや高知らず 水
激つ 瀧の都は 見れど飽かぬかも

37 見れど飽かぬ吉野の河の 棠渾の絶ゆることなくまた還り見む

題詞は「吉野の宮に幸しし時」と書いているだけであるが、これは持統天皇の行幸である。人麿の歌のなかで最も華やかなで、美しい歌である。

持統天皇が統治する國は多くあるけれど吉野の國ほどすてきな國はない。花が舞い、清い

川が流れる。その秋津の野辺に大宮がある。その大宮に大宮人が船を並べて朝に渡り、夕に渡る。水激つ瀧の都はいくら見ても見飽きることはない。

九州天皇家の「吉野」は水の都だった。人麿が「見れど飽かぬ」と賞賛したのは「吉野の河の流れ」である。だがそれは上流の流れではない。賞賛したのは大宮人が船を並べて渡る河口の流れである。吉野の國を流れる川は「水激つ」川だった。「水激つ」とは「ミズギラフ」「ミズハシル」「ミズタギツ」等の訓がある。西郷は「ミズギラフ」が安定感があるとしている（万葉私記）のはいいとして、「滝」を「水の激しく流れるところ」と解釈しているのはまちがいである。「吉野」を奈良吉野として疑わない故のまちがいである。なるほど、奈良吉野の清流は「激しく流れる」川である。だが人麿歌の「水瀧つ」は「激しく流れる」という意味ではない。万葉註がいうように「逆巻く」という意である。故に賞賛されたのである。では「逆巻く」とは何か。なぜ水が逆巻くのか。普通の川の流れではこのような現象は起きない。たとえば奈良吉野川はただ上流から下流に流れる普通の川で、「水激つ」と歌われる川ではない。

人麿歌の「吉野」の國の川は海に流れ込んでいた。だが、それも何も特別なことではない。日本のほとんどの川は海に流れ込む。だが、「吉野」の國の川が流れ込む海は干潟の海だった。この海は潮の干満の差が激しい。干潮の時は干潟となる。満潮の時は淡海となる。朝夕干潟に潮が満ちてくる。吉野の川の流れが干潟に押し寄せる潮とぶつかり逆巻く。川と干潟の海の潮が織りなす水の造形美が「水激つ 瀧」だった。

吉野の宮は小倉南区を流れる竹馬川の河口、吉田に存在した。海は小倉南区曾根の海である。吉野の宮は北九州随一の景勝地に建てられた水の宮だったのである。この名高い吉野宮は竹馬川河口のどこにあったのか確かなことは分からない。だが推測はできる。小倉南区に「綿津美神社」がある。この神社が「吉野宮」ではないだろうか。神社の周囲が海だった頃の古い絵図が残っている。目前は海である。



大宮人は朝と夕と二回、川を渡ったという。この情景を想像することはさほど難しくはない。これは役人の日常である。彼らは通勤電車で揺られて役所に通う代わりに、船に揺られて大宮（役所）へ出勤した。大宮人はただ遊んでいたわけではない。人麿もただ歌を歌っていたわけではな

い。人麿も大宮人も朝、役所へ出勤し仕事をして、夕方には家路へと急いだのである。

天武が、「淑き人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よ良き人よく見」と、何度も繰り返して見るようにと詠った吉野とは、竹馬川の河口に存在した九州天皇家の吉野である。

神武と「吉野」

「淑き人」とは一体誰を想定していたか分からない。だが、九州天皇家において、この「水激つ 瀧の都」を最初に注目したのは神武天皇である。神武は國見の丘（小倉南区・長野城跡）に立て籠もる熊襲の二人の武将との戦いの最中に、数人の兵士を連れて、吉野見物に訪れている。そして後年、その長野城跡に登り、竹馬川の流れを見て「蜻蛉（あきつ）」と感想を述べた。竹馬川の湾曲した流れが蜻蛉の交尾の姿を彷彿させたのである。以来、この地は「あきつ（秋津）」と呼ばれるようになった。人麿はこの故事を知っていた。故に、小倉南区を「吉野の國の 花散らふ 秋津の野邊に」と詠ったのである。

天武の脳裏には神武の故事があったのかもしれない。九州吉野は九州天皇家の数ある都の中で、とびきり輝かしい、「水激つ 瀧の都」だった。



九州天皇家の吉野の國
水激つ、瀧の都
(小倉南区吉田、竹馬川河口)

天武の代の歌は九州天皇家の歌

明日香清御原宮天皇の代に収録された「伊勢」の歌、「吉野耳我」の歌、「吉野宮」の歌はすべて九州天皇家の歌である。万葉編者は壬申の乱の舞台となった吉野、伊勢は九州天皇家の吉野、伊勢であることを6首の歌でもって示した。壬申の乱の始まりは吉野の耳我の嶺である。耳我の嶺は九州天皇家の豊山だった。故に天武はこの山に登った。そして下山した天武天皇が蜂起したのは伊勢だ。だがこの伊勢は奈良天皇家の伊勢ではない。七世紀の九州天皇家の伊勢だ。

万葉編者は明確なテーマを持って天皇の代を編纂している。天武の代の歌6首は壬申の乱をテーマとした歌である。壬申の乱は九州天皇家の奈良に存在した日本國天皇家への反乱であった。この乱の勝利によって、天武は天皇位に就いた。日本國天皇家に代わって九州天皇家が初めて日本の支配者となった大事件が壬申の乱であった。天武の代の6首は壬申の乱に関する歌であるが、

これらの歌は九州天皇家の歌である。

万葉編者が編纂した歌は九州天皇家の代の歌である。神武は、当時、九州の支配勢力であった「熊襲」との長い戦いに勝利して、「倭（やまと）」の國を建国した。天武は壬申の年に、日本の支配者であった日本國天皇家に勝利して天皇の位に昇った。万葉編者が編纂した歌は雄略の代から天武の代まで、九州天皇家において詠まれた歌ばかりである。

だがこうした編纂は持統の代において大転換する。それは持統の代の政治的な転換を反映しているからである。持統の代に移る前に、近江大津宮の天皇の代の歌を考えてみよう。万葉の「近江大津宮天皇」は通常、日本書紀天智天皇だと理解されている。これも大いなる誤解である。

近江大津天皇の代、鯨魚取りの歌

万葉集第二卷挽歌には「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇」の大後の歌が載せられている。「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇」とは天智天皇と云われる。だが万葉集はその題詞に天智天皇と書いているわけではない。では、万葉集の「近江大津宮の天皇」と日本書紀の天智天皇は同一人物なのか。

日本書紀の天智天皇は都を琵琶湖「近江」に遷した。万葉集の「近江大津宮天皇」の都も「近江」である。どちらも都は「近江」である。この「近江」が同じであれば二人は同一人物である。検討してみよう。

万葉集編者は「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇の代」の第7首に大後の歌を載せている。大后とは「近江天皇」の後である。その歌は簡単明瞭である。

近江大津宮に天の下知らしめしし天皇の代

大後の御歌一首 153

鯨魚取り 淡海の海を 沖放けて 漕ぎ来る船 邊附きて 漕ぎ来る船 沖つ櫂 いたく
撥ねそ 邊つ櫂 いたく撥ねそ 若草の 孺の 思ふ鳥立つ

「鯨魚」とは鯨のことである。鯨は魚と思われていたから「鯨魚」と書かれていた。従って、「鯨魚取り」とは海にかかる枕詞ではない。捕鯨そのものである。大後の歌は「淡海」における捕鯨の実景である。捕鯨の船だからこそ櫂をいたく撥ねたのである。

大後の歌は「近江大津宮」が琵琶湖「近江」ではないことを表明している。琵琶湖では鯨は捕れない。琵琶湖で鯨を見た者はいない。琵琶湖での漁は櫂をいたく撥ねたりしない。大后が詠った「淡海の海」とは琵琶湖「近江」ではない。

では、鯨が捕れた「淡海」とはどここの海か。九州天皇家の「淡海（近江）」である。九州天皇家の「淡海」とは小倉南区の曾根の海である。周防灘では古来鯨が捕れた。船が鯨を追って周防灘から小倉南区曾根の淡海へ漕ぎ入ってくる。捕鯨は鯨を曾根の淡海の浅瀬に追い込む方法だったのであろう。追い込めば鯨に逃げ道はない。船が鯨を淡海の浅瀬へ浅瀬へと追い込んでいく。

捕鯨船の漕ぎ手は必死である。櫂が踊り、撥ねる。だが、天皇は死んでしまわれ。今日だけは船の櫂をひどく撥ねて、音を出さないでくれ。若い孺がかわいがっている鳥が飛び立ってしまうから。

近江大津天皇とは九州天皇家の天皇

「近江」とは九州天皇家の「近江」である。近江大津宮とは小倉南区の「淡海の天津」にあった。この海では鯨が捕れた。「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇」とは九州天皇家の天皇である。その天皇は鯨が泳ぐ淡海に面した「近江大津宮」で亡くなった。「近江大津宮」で亡くなった天皇とは九州天皇家の天皇である。日本書紀の天智天皇ではない。九州天皇家の近江天皇で

ある。

日本書紀天智天皇

「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇」と題詞に書かれた天皇は九州天皇家の天皇である。神武以来、北九州を統治してきた九州天皇家の天皇である。ところが、ほぼ同じ時代、偶然にも、もう一つの「近江（琵琶湖）」に天皇がいた。日本書紀二七巻の天智天皇である。この天智天皇は当時の日本の支配国家であった日本國の天皇である。二人は別人である。日本書紀天智天皇は奈良の天皇である。そして琵琶湖近江に遷都した。

日本國天皇家の首都は奈良藤原京である。だが日本書紀は天智天皇が意外な場所にいたことを伝えている。万葉集とは関係ないが、壬申の乱に到る正当な歴史を理解するために天智紀を読んでみよう。先に見たように、天武の蜂起は九州天皇家の伊勢、つまり行橋市である。ではなぜ行橋市に居た天武が大友王の軍と戦うことが出来たのか。壬申の乱前夜、日本國天智天皇はどこにいたのか。太宰府にいたのである。

- 662年 白村江敗戦
- 664年 5月17日百済の鎮將劉仁願、朝散大夫郭務 等を遣して、表函と獻物とを進る。
10月1日に、郭務等を發て遣す勅を宣たまふ。是の日に、中臣内臣、沙門智祥を遣して、物を郭務に賜ふ。
10月4日に、郭務等に饗賜ふ。
12月12日郭務等罷り帰りぬ。
- 665年 唐国、朝散大夫沂州司馬上柱國劉徳高、右戎衛郎將上柱國・百済禰軍・朝散大夫柱國郭務等凡て254人、7月28日に対馬に至る。
9月20日に、筑紫に至る。
9月22日に表函を進る。
10月の11日に、大きに菟道に聞す。
11月の13日に劉徳高等に饗賜ふ。
12月14日に、物を劉徳高等に賜ふ。この月に、劉徳高等罷り帰りぬ。
是歳、小錦守君大石等を大唐に遣す。
- 665年 送唐客使劉徳高を送る。唐使法聰來日
- 667年 3月19日に、都を近江に遷す。
5月5日に、天皇、蒲生野に縱獵したまふ。時に、大皇弟・諸王・内臣及び群臣、皆悉に従なり。
7月栗前王を以て、筑紫率（つくしのかみ）に拝す。
11月9日に、百済の鎮將劉仁願、熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等を遣して、大山下境部連石積等を筑紫都督府に送る。
13日に、司馬法聰等罷り帰る。小山下伊吉連博徳・大乙下笠臣諸石を以て送使とす。
- 668年 高句麗滅亡
- 669年 正月9日に、蘇我赤兄臣を以て、筑紫率に拝す。
藤原内大臣死去。
小錦中河内直鯨等を遣して、大唐に使せしむ。
12月又大唐、郭務 等2千余人を遣せり。
- 670年 法隆寺全焼。
- 671年 春正月13日に、百済の鎮將劉仁願、李守眞等を遣して、表上る。
6月に、栗隈王を以て、筑紫率とす。
7月11日、唐人李守眞等、百済の使人等、並びに罷り帰りぬ。
11月10日、対馬國司、使を筑紫太宰府に遣して言さく、「月生ちて二日に、沙門道久・

筑紫君薩野馬・韓嶋勝裳婆・布師首磐、四人、唐より来りて曰さく、『唐国の使人郭務等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、総合二千人、船四十七隻に乗りて、俱に比知嶋に泊まりて、相謂りて曰はく、今吾輩が人船、数衆し。忽然に彼に到れば、恐るらくは彼の防人、驚き駭みて射戟はむといふ。乃ち道久等を遣して、預め稍に来朝る意を披き陳さしむ』とまうす」とまうす。

671年 大友皇子太政大臣。

この月に(10月)に、天皇、使いを遣して袈裟・金鉢・象牙・沈水香・栴檀香、及び諸々の珍財を法興寺の佛に奉らしめたまふ。

12月3日に、天皇近江宮に崩りましぬ。

白村江の敗戦から約十年間の日本書紀の記事である。この期間は日本史上最も困難な時期であったといえる。白村江敗戦の二年後の624年、百済の鎮将劉仁願が大使を派遣してきて以来、671年までの8年間日本國と唐との間に外交が繰り広げられた。この間、唐からの国書は三度届いている。

664年 5月17日百済の鎮将劉仁願、朝散大夫郭務 等を遣して、表函を進る。

665年 唐国、朝散大夫沂州司馬上柱國劉徳高、9月22日に表函を進る。

671年 春正月13日に、百済の鎮将劉仁願、李守眞等を遣して、表上る。

この時、日本國天皇天智への表函はどこに届けられたのか。665年の記事から考えてみよう。

665年、9月20日に、筑紫に至る。9月22日に表函を進る。

唐の朝散大夫沂州司馬上柱國劉徳高が筑紫(博多)に到着したのは9月20日である。表函(親書)を天皇に献上したのが9月22日である。筑紫に到着して二日後に親書を献上している。この時、天智天皇は筑紫(博多)から二日で到着する所にいたということになる。

日本國天智天皇は太宰府にいた

天皇天智がいた御所は奈良ではない。天智は、この時、奈良ではなく博多にいた。天智天皇がいた御所は太宰府大極殿である。唐との外交を繰り広げたわが國の朝廷は太宰府にあった。そして天智は2年後の667年3月17日に都を近江に遷している。この遷都は奈良藤原京から琵琶湖近江への遷都である。当時の日本國の京は奈良藤原京で、そこから琵琶湖近江に遷都したのである。都が奈良から琵琶湖近江に遷されて間もなく法隆寺(若草伽藍として発掘)が全焼している。

天智天皇が、667年3月に琵琶湖近江に遷都して後の11月に、筑紫都督府の記事がある。

667年 11月9日に、百済の鎮将劉仁願、熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等を遣して、大山下境部連石積等を筑紫都督府に送る。

13日に、司馬法聰等罷り帰る。小山下伊吉連博徳・大乙下笠臣諸石を以て送使とす。

7月栗前王を以て、筑紫率(つくしのかみ)に拝す。

大山下境部連石積等が送られてきたのは、筑紫都督府と書いている。彼らは665年に天智天皇が唐へ送った使者であった。その使者が送られて筑紫都督府に戻ってきた。筑紫都督府とは太宰府のことである。彼らは何故奈良ではなく太宰府に送られてきたのか。その理由はそこに天皇が居たからである。この時、日本國の天皇天智は唐との外交のため琵琶湖近江ではなく太宰府にいたのである。太宰府は日本國の西の京であった。

664年朝散大夫郭務が持ってきた「表函」は、実は、唐皇帝の親書ではなかった。故に唐の使者は京には入れなかったと伝わる。この京とは太宰府である。太宰府にいた天智天皇とは奈良

藤原京を首都とする日本國の天皇であった。671年10月太宰府にいた天智天皇は、使者を派遣して、法興寺に袈裟・金鉢・象牙・沈水香・栴檀香等をお供えしている。法興寺は奈良飛鳥に存在した高句麗様式の国立の大寺である。日本國天皇天智は、671年12月3日、近江宮で亡くなった。この近江宮とは琵琶湖近江の宮である。

この時代、滋賀県近江に日本國の天皇がいた。奇しくも、九州小倉南区の近江には、九州天皇家の天皇がいた。どちらも近江である。不思議な因縁である。万葉編者は「近江大津宮」の天皇の代を設定することによって、九州天皇家の近江大津宮の天皇の存在を明らかにした。

額田王が詠った「鏡山陵」は九州天皇家の近江天皇陵

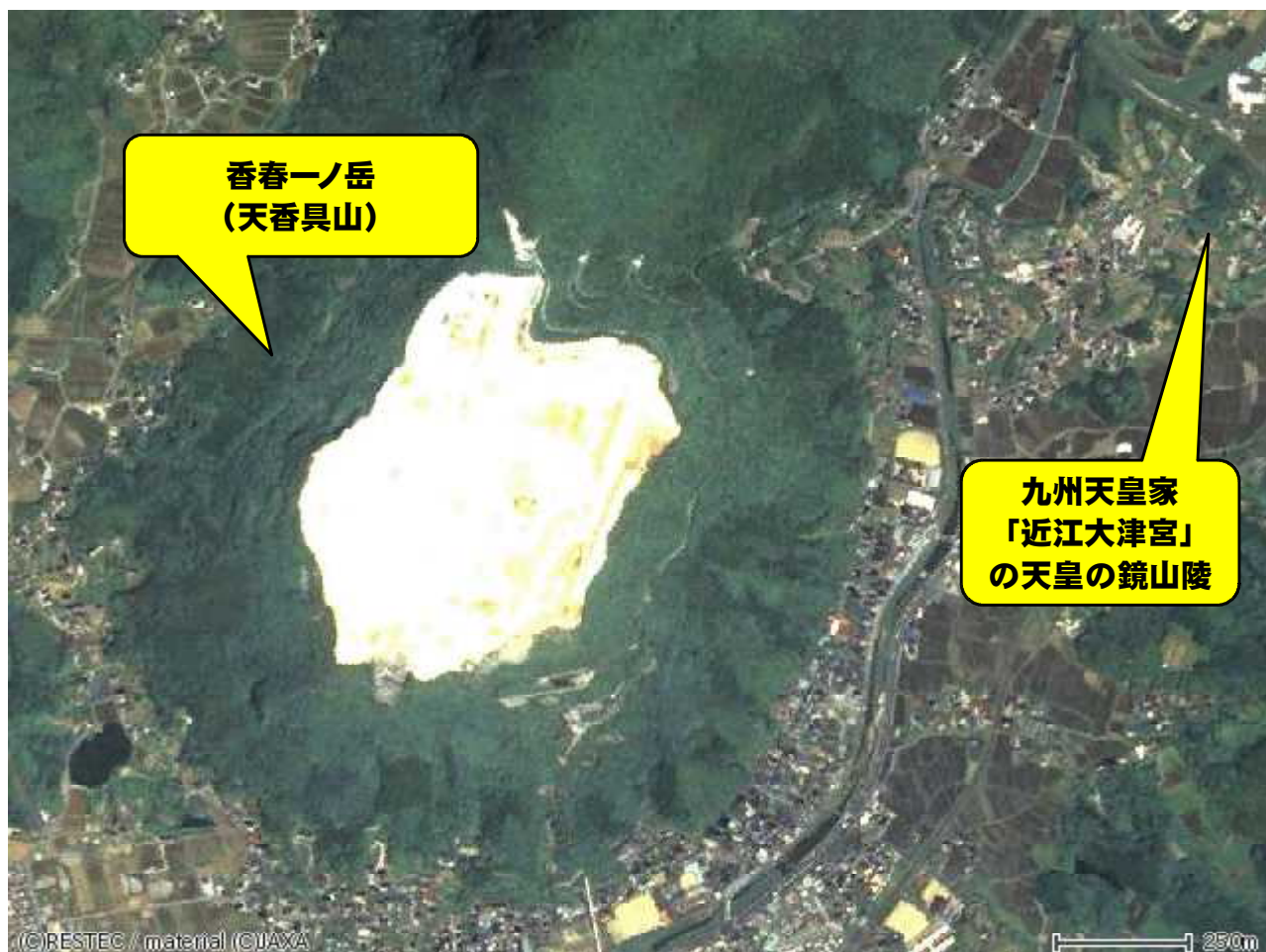
万葉編者は第二巻の挽歌として「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇」が亡くなった時の額田王の歌をとりあげている。額田王の挽歌には近江大津宮天皇が埋葬された陵の名前が具体的に詠われている。

近江大津宮に天の下知らしめしし天皇の代

山科の御陵より退き散くる時、額田王の作る歌一首 155番歌

やすみしし わご大王の かしこきや 御陵仕ふる 山科の 鏡の山に 夜はも 夜のことごと 晝はも 日のことごと 哭のみを 泣きつつ在りてや 百磯城の 大宮人は 去き別れなむ

八方を治められるわが大王が埋葬された恐れ多い御陵に仕え、山科の鏡の山に、夜は夜ごとに、晝は日ごとに、泣いてばかりいる百磯城の大宮人は今は去り、別れていくのであろうか。



近江大津宮天皇の陵は額田王の歌にあるように「鏡山」である。鏡山とはあまりにも明快な名前である。なぜ鏡の山と呼ばれたのか。その理由はこの陵が手鏡の形をしているからである。鏡山とは香春町の鏡山神社である。鏡山古墳は手鏡の形をしている。

万葉集には中大兄が若い頃、恋の悩みを倭三山の恋争いの故事に託して詠った歌がある。恋い争いとは額田王をめぐる弟、天武との争いである。恋い争いをしたという倭三山とは香春岳のことである。その香春岳の東に広がる田んぼの中に鏡山がある。

この古墳は北の集落の人々によって代々護られてきたと聞いた。この鏡山陵に眠っている天皇が額田王が鏡山に埋葬されたと詠った「近江天皇」である。近江大津宮にいた九州天皇家の天皇は香春町の鏡山に眠っている。この天皇が天武の実兄である。この実兄は若い頃は「中大兄」と呼ばれていて、額田王を妃としたことは伝わるが、その他のことはほとんどわからない。

鏡山陵は九州天皇家の近江大津宮（小倉南区）で天下を統治した九州天皇家の近江天皇陵である。日本書紀天智天皇は額田王が詠った鏡山陵に埋葬されたのではない。日本書紀は天智天皇が亡くなった記事は載せたが、その御陵がどこにあるか一切書かなかった。日本書紀天智天皇の御陵は京都市山科の陵である。京都山科の陵に眠る天智天皇は日本國天皇家の天智天皇である。

持統の代、近江の荒れたる都の歌

持統の代の歌に入ろう。天武の妃の一人野讃良皇女が後の持統天皇である。日本書紀は野讃良皇女について「日本國天皇天智と蘇我山田石川麻呂大臣の娘、遠智娘との間にできた娘」と書いている。日本書紀天智天皇とは日本國の天皇である。蘇我石川麻呂は日本國の重臣である。日本國の天皇と重臣蘇我石川麻呂の娘との間に女の子が生まれた。その女の子が天武の妃となった。

野讃良皇女が天武の妃となったのは十三歳の時であった。持統の代の歌の第一首はその持統天皇の歌である

藤原宮に天の下知らしめしし天皇の代

天皇御製歌

28 春過ぎて 夏来るらし 白袴の 衣乾したり 天の香具山

持統天皇の歌としてこれほど有名な歌はない。一面の若緑の中に白い衣が風にひるがえっている。その風が運んでくる若葉の匂いがするような歌である。季節は初夏。歌も瑞々しいが持統も瑞々しい。万葉編者は持統の代の第一首にこの歌を取り上げている。これは当然といえる。だが二番目の歌は一転して人麿の「近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麿の作る歌」である。

藤原宮に天の下知らしめしし天皇の代

近江の荒れたる都を過ぐる時 柿本朝臣人麿の作る歌

29 玉櫛 畝傍の山の 檜原の 日知の御代ゆ あれましし 神のことごと 柂の木の いやつぎつぎに 天の下 知らしめししを 天にみつ 倭をおきて あをによし 平山を 越え いかさまに 思ほしめせか 天離る 夷にはあれど 石走る 淡海の國の ささなみの 大津の宮に 天の下知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は 此処と聞けども 大殿は 此処と言へども 春草の 茂く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる 百礮城の 大宮處 見れば悲しも

反歌

30 ささなみの 志賀の辛崎 幸くあれど 大宮人の 船待ちかねつ

31 ささなみの 志賀の大わだ 淀むとも 昔の人に またも逢はめやも

万葉編者は天の香具山の歌と近江の宮の廢墟の歌を連続して掲載している。私たちにはこの二つの歌につながりは見出せない。奇妙な配置といえる。だが持統の歌と人麿の歌を持統の代の冒頭に配置したのは万葉編纂者の明確な意図があったと思われる。それは何か。

天の香具山の歌は持統の九州生活の始まりの象徴

持統が歌った天の香具山は持統が少女時代を過ごした奈良の香具山なのか、それとも九州天皇家の天の香具山なのか。歌自体に判断材料はない。だが万葉編者の認識は一貫しているとみるべきであろう。持統が詠った香具山は九州天皇家の天皇が國見をした香具山である。持統の歌の天の香具山は、その山頂から海が見えると岡本宮天皇が歌った九州天皇家の香具山である。これが万葉編者の認識である。

持統の天の香具山の歌が持統の代の第一首である。この歌によって持統の代は始まる。いわばこの歌は持統の代の始まりを象徴している。持統は十三歳の時、奈良を離れ、九州の大海人皇子のもとに嫁いできた。ここから持統の九州での生活が始まる。持統は九州天皇家の倭（やまと）の國の名山、天の香具山の麓の民家に干された白い衣に初夏を訪れをみた。

「あゝ、この國の人々はもう白い衣を用意している。もう夏なのだ。」

九州香春の初夏の訪れを故郷の奈良より早く感じたのであろうか。天の香具山の歌は持統の九州時代の幕開けを告げる歌としてここに収録された。初夏の歌は瑞々しい。持統も異国で初々しい生活を始めていたのである。

近江の荒れたる都は持統の代の終焉の象徴

「近江」とは九州天皇家の「近江」か、それとも日本國天皇家の「近江」、琵琶湖か。ここでも万葉編者の認識は一貫している。「近江」とは九州天皇家の近江、小倉南区の曾根干瀉に広がる淡海である。ここに九州天皇家の「近江の大津宮」が存在した。近江大津宮は九州天皇家の伝統の大宮だった。歴代はここに住んでいた。古くは景行天皇がここに住んでいた。「鯨魚取り」の歌を歌った大后もその夫の天皇もここにいた。天武もこの宮にいた。そして持統もまたこの宮にいた。持統にとってはこの宮は草壁皇子を産んだ思いで深い宮でもあった。

人麿は歌で「石走る淡海の國のささなみの大津の宮に天の下知らしめしけむ天皇」と詠っている。人麿が詠った天皇とはどの天皇なのか。この天皇とは万葉集が「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇の代」と題詞に書き、その死に臨んで大后が「鯨魚取り」を歌った「近江天皇」なのであろうか。九州天皇家では「近江大津宮の天皇」の次の天皇が天武である。天武の次の天皇が持統である。人麿は持統の二代前の天皇のことを詠ったのであろうか。だがもしそうであるなら万葉編者は人麿の歌を「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇の代」に編集したのであろう。

人麿の歌は「持統の代」に編纂されている。故、人麿が「石走る淡海の國のささなみの大津の宮に天の下知らしめしけむ天皇の神の尊」と詠った天皇とは持統天皇である。

持統が住んでいた近江大津の宮が廢墟となっている。廢墟とは終わりの象徴である。持統天皇が単にこの宮を留守にしているというだけのことであるならば廢墟とはならないし、人麿が廢墟と詠ったりしない。近江大津の宮が廢墟となった。これは持統の代の終わりを象徴している。だが持統の代の終焉とは持統の死を意味しているのではない。持統の代の終焉とは九州天皇家における持統の代が終わったことを意味している。

持統天皇はこの地を去っていった。持統は天武に続き、最愛の息子草壁皇子まで失ってしまった。哀しみと失意の中、689年、持統は夫と息子の國、九州を去り、父の國、日本國に帰って行ってしまった。当然九州天皇家の重臣も日本國に移った。だが、人麿は理由はわからないが九州に残った。九州の人麿にとって日本國の持統の朝廷は、「遠の朝廷」となった。

持統の代の冒頭の二つの歌は持統の代の始まりと終焉を意味した。万葉編者は持統天皇が九州天皇家の大海人皇子のもとに嫁いできた頃に詠んだ天の香具山の初夏の歌を載せ、そして、持統天皇が夫と草壁皇子をなくした後、九州を去ったあとの廢墟の歌を載せた。この二つの歌によって持統天皇の代の始まりと持統の代の終焉を伝えた。見事な配置というべきであろう。

万葉集は九州天皇家への鎮魂歌

持統天皇を最後として九州天皇家の伝統の大宮、近江大津の宮には誰も住まなくなった。反歌にはその情景が詠まれている。小倉南区曾根の海は「ささなみ」である。船着場である「志賀の辛崎」は昔のままで変わらないけれど、その港で大宮人が乗った船をいくら待っても、もう船がやって来ることはない。

九州天皇家の近江大津宮は廃墟となった。人麿は九州天皇家伝統の「近江大津宮」の廃墟を詠い、その歌によって九州天皇家終焉の鎮魂歌とした。人麿の鎮魂歌は万葉編者の心でもある。万葉編者は人麿の鎮魂歌を万葉集の主旋律とした。万葉編者も、また、九州天皇家終焉への鎮魂を九州天皇家の御代の歌の編纂をもって果たそうとしたのである。万葉編者は重複となるが、あえて高市古人の歌を次に載せている。

藤原宮に天の下知らしめしし天皇の代

高市古人、近江の舊墟を感傷みて作る歌

32 古の人に われあれや ささなみの 故き京を 見れば悲しき

人麿は九州天皇家の歌人として近江の廃墟を悲しく詠った。だが私は九州天皇家の人間ではない。だけれども、持統を最後として、誰も住まなくなった九州天皇家の近江の大津宮を見れば悲しいことだ。

「古」とは「いにしへ」と訓む。「いにしへ」とは持統近畿天皇家から見た過ぎ去った代である。持統近畿天皇家の前の代とは持統九州天皇家の代である。

33 ささなみの 國つ美神の 浦さびて 荒れたる京 見れば悲しも

笹浪の國の美神の港は寂れてしまった。荒れてしまった近江の都を見れば悲しいことである。

美神とは持統天皇である。「浦さびて」が原文である。「浦」とは港である。これを現代風に「こころ」と意識してはならない。高市古人は人麿の哀しみに同調して、近江宮の荒廢を詠ったのである。

持統の代、近畿天皇家の始まり

万葉編者は慎重に歌を選び、九州天皇家の歴史を再現して見せた。持統の九州の時代は終わった。持統の奈良遷都と共に万葉歌の歌舞台も関西へ遷っていく。

690年、持統天皇は日本國藤原京大極殿で即位した。この王朝を「近畿天皇家」と呼んでいくことにする。その後、王宮を造った。その王宮の井戸を詠った歌がある。この歌は奈良の持統王朝、乃ち近畿天皇家の始まりを告げる歌である。

藤原宮に天の下知らしめしし天皇の代

藤原宮の御井の歌

52 やすみしし わご大王 嵩照らす 日の皇子 荒栲の 藤井が原に 大御門 始め給へて
埴安の堤の上に あり立たし 見し給へば 日本の 貴香具山は 日の経の 大御門に
春山と 茂さび立てり 畝火の この瑞山は 日の緯の 大御門に 瑞山と 山さびびま
す 耳成の 貴管山は 背面の大御門に 宣しなべ 神さび立てり 名くはし 吉野の
山は 影面の 大御門ゆ 雲居にそ 遠くありける 嵩知るや 天の御蔭 天知るや 日
の御蔭の 水こそは 常にあらめ 御井の清水

この歌は藤原京造営の歌ではない。題詞にあるように持統の「藤原宮」の造営の歌である。藤

原宮はどこに造営されたのか。歌が明らかにする。藤原宮は東に青香具山、西に畝傍、北に青菅山に囲まれている。この三山の配置は奈良明日香である。九州天皇家の倭三山は連山である。奈良の倭三山は都の東と西と北に存在する。奈良の香具山は「日本の青香具山」と詠われている。作歌者は律儀に「やまと」と「日本」を区別している。「やまと」は九州を指し、「日本」は奈良をさす。この歌には「吉野」が詠われている。藤原宮の歌では「吉野」は、「名くはし吉野の山」と詠われている。主題は山である。この「吉野」は奈良吉野の山である。もはや舞台は関西に移ったのである。

万葉歌は九州天皇家終焉の鎮魂歌

万葉集第一巻の雑歌は天皇の代に分類されている。

泊瀬浅倉宮に天の下知らしめしし天皇の代	一首
高市岡本宮に天の下知らしめしし天皇の代	五首
明日香川原宮に天の下知らしめしし天皇の代	一首
後岡本宮に天の下知らしめしし天皇の代	八首
近江大津宮に天の下知らしめしし天皇の代	六首
明日香清御原宮に天の下知らしめしし天皇の代	六首
藤原宮に天の下知らしめしし天皇の代	五五首
(元明天皇の代)	八首

これらの天皇は全て九州天皇家の天皇である。藤原の宮の天皇とは持統天皇である。持統は元は日本國天皇家の皇女である。だが、天武の妻となり、天武の死後、即位した。ここに近畿天皇家が始まることとなるが、万葉編者は持統を九州天皇家と考えたので持統の代を設けた。だが、持統の代には元明天皇の代の歌も含まれている。しかし、万葉編者は元明の代を設けなかった。万葉編者は、元明はもはや九州天皇家の天皇ではない。近畿天皇家の天皇であるという認識に立っていたのであろう。

天武は壬申の乱に勝利して九州天皇家として初めて日本の天皇位に登った。天武は日本の天皇として全国を統治した。朝廷は太宰府にあった。毎年、四回、全国から使者が太宰府に参内した。このまま九州天皇家の全国統治が続くかと思われた。ところが、持統が九州天皇家の命運を握ることになる。

持統は十三歳の時、日本國天皇家から九州天皇家の皇子、大海人皇子のもとに嫁いだ。持統は日本國天皇天智の皇女だった。だがその位はそれほど重くはなかったと思われる。はるか遠い九州天皇家の倭（やまと）まで嫁いで行ったのは日本國天皇家における持統の弱い立場を反映している。持統はやがて自分が天皇位に就くことになるなど、夢想だにしなかったであろう。だが、持統に天命が下る。夫、天武が日本國天皇家に反乱し、勝利したのである。天武は天皇となった。持統は壬申の乱において天武を助けて勝利に貢献した。持統にとって、日本國太政大臣大友王はいわば「身内」である。だが、持統は「身内」より夫、天武をとった。天武が持統を皇后としたのは当然である。

天武亡き後は、草壁皇子が天皇位を継ぐ。もし、草壁皇子が健在で、天皇位を継承していたなら、日本の王都は長らく九州太宰府だったかもしれない。ところが草壁皇子が亡くなってしまう。持統はここで九州天皇家にとって大きな意味を持つ決断をする。九州を去ろう。九州にもはやとどまる理由はない。日本國に戻って即位しよう。こうして、九州天皇家は終わりを迎えた。

九州天皇家鎮魂のために

九州天皇家の歴史は不思議としか云いようがない。もし天武が乱を起こさなかったら、何事もなく、九州天皇家は九州に存続したであろう。そして、もし、天武の后が日本國天智天皇の娘、

野讃良皇女でなかったら、九州天皇家は天武の没後も日本國に遷ることもなく、九州に存在したかもしれない。九州が日本の中心という政治が続いたと思われる。

いやいやそうではないかもしれぬ。天武は生存中、畿内に都を造ろうとしていた。天武は畿内に遷って天下を治めようと考えていたのかもしれない。持統はその遺志を継いで畿内に遷ったとも考えることができる。持統の心中は分からぬが、いずれにせよ、神武から天武まで続いた九州天皇家は持統の代に終わった。やがて九州天皇家の都があった倭（やまと）、近江大津、吉野、泊瀬、伊勢、橘の島は廢墟となり、ここに九州天皇家の都があったことすら分からなくなるであろう。九州天皇家随一の名勝、吉野の白波さえ、今や、語り継がれるだけのものとなっているではないか。九州天皇家は人々の記憶から消え、歴史から消えていく。・・・九州天皇家には多くの倭歌がある。私はこれらの倭歌でもって忘れ去られていく九州天皇家への鎮魂歌としよう。長く長く時代が経た世にもこの鎮魂歌だけは歌い継がれていくことを祈ろう。

「やまと」の國は九州天皇家の始まり

九州天皇家の始まりは神武天皇である。神武天皇は長い東征の末、倭（やまと）の國を建国した。その國には畝傍の山があった。畝傍山はその名が示す如く、畝の形をした三連山である。その一ノ岳が天の香具山と呼ばれた名山である。九州天皇家の高市岡本宮の天皇はこの香具山に登って國見をした。その國は「山常」と詠われている。「山常」とは神武建国の「やまと」である。倭（やまと）の國が九州天皇家の始まりである。これが根本である。この根本から万葉集を始めよう。万葉集の一番歌、二番歌は「やまと」を詠った二人の天皇の歌としよう。

九州天皇家の栄光の都、近江大津

九州天皇家は神武以来、東北九州を統治してきた。その輝かしい都の一つが近江にあった。近江とは淡海とも書かれる。淡海とは小倉南区曾根の海である。干潮時は干潟となり、満潮時は淡海となる天下第一の景勝地である。

この海の大きな港が「大津」と呼ばれた。この大津に九州天皇家の大宮があった。大宮は地名に因んで「近江大津宮」と呼ばれた。九州天皇家では歴代がこの水の都、淡海に宮を造営した。古くは景行天皇、成務天皇である。近々の天皇が「近江大津宮に天の下知らしめしし天皇」である。この天皇の皇后は挽歌として「鯨魚取り」を歌っている。この挽歌は九州天皇家の「近江」が海であることを表明する。九州天皇家の近江（淡海）では鯨がとれた。近江（淡海）の海では捕鯨が盛んだった。近江大津宮の天皇は若き日に、弟の大海人皇子と額田王を巡る恋の悩みを詠っている。

奇しくも日本國の天智天皇も「近江」に遷都した。この「近江」とは琵琶湖近江である。この遷都は恐らく唐との決戦に備えたものであろう。一時的な遷都である。ほぼ同時代に二つの「近江」が存在した。そしてそれぞれに天皇がいた。九州の「近江大津（小倉南区）」には九州天皇家の天皇がいた。日本國の「近江（大津市錦織遺跡）」には日本國の天皇天智がいた。九州の近江の天皇が「天智」と諡されたのではない。「天智」とは日本國の天皇への諡である。また日本國の天皇が「近江天皇」と呼ばれたこともない。「近江天皇」と呼ばれたのは九州天皇家の天皇だけである。

九州天皇家の転機、壬申の乱

九州天皇家の歴史は天武の代に大きく転換した。壬申の乱である。この時、天武天皇が登った山は「耳我の嶺」と呼ばれた山である。この山は九州天皇家の靈山である。そして天武は伊勢で蜂起した。この伊勢は九州天皇家の伊勢である。伊勢國の伊良真の嶋に流された麻績王の歌がある。この歌は伊勢が九州天皇家の伊勢であることを何よりも物語る。なぜなら麻績王の家は代々伊勢神宮に麻布を納めてきた家柄だった。天照大神は九州天皇家の祖先神である。伊勢神宮が九州にあったのは当然である。

古代天皇家の最大の事件だった壬申の乱の結果、九州天皇家は日本國天皇家に勝利して、天武

は初めて天皇位に就いた。九州天皇家が日本の支配者となった。これが壬申の乱の真実である。「耳我の歌」「伊勢の歌」「吉野の歌」はこの革命の真実を伝える歌である。

九州天皇家の終焉と持統近畿天皇家の始まり

さて、持統の代に移ろう。持統は日本國天皇家から九州天皇家に嫁いできた。九州天皇家の都、「やまと」に越してきた持統は異国の生活に新鮮な驚きを感じた。それが九州天皇家の天の香具山の歌となった。この歌は持統の九州生活の始まりを象徴する。そして壬申の乱が起こる。勝利した夫は天皇となり、持統は皇后となった。やがて夫が亡くなり、我が子、草壁が皇位を継承する。そのはずだったが、草壁皇子が夭折した。哀しみの中、持統は決意する。もはや九州にとどまることはできない。生まれ育った日本國の京に帰ろう。草壁皇子の死をきっかけに持統の九州での代は終わりを迎えることになった。持統は九州を去っていった。持統の奈良遷都とともに九州天皇家も奈良へ移った。九州天皇家は終焉を迎えた。その結果、あれほど賑わった近江大津の宮は廃墟となった。人麿の廃墟の歌は九州天皇家の終焉にたいする鎮魂歌である。持統は日本國の藤原京で即位した。ここに持統の新しい代が始まる。ここからは近畿天皇家の代である。我々は今その代に生きている。

万葉集は日本文学史上最も優れた倭歌集である。万葉集は日本の誇る優れた文学作品である。だが、この倭歌集は単なる歌集として編纂されたのではない。万葉編者は九州天皇家から近畿天皇家へ時代は移り、歴史から消え去っていく九州天皇家の鎮魂歌としてこの倭歌集を編纂したのである。

最後に、持統奈良遷都の中、ひとり九州に残された人麿の寂寥感溢れる歌でこの章を閉じることしよう。

人麿は持統の代の末に「讃岐」に流された。そして文武の代に「石見」に流されたと伝わる。(石見国風土記)この伝承は確かなものであると思われる。人麿は最後流人として生涯を閉じた。その最後は人麿に替わって詠った友人の歌でも確かめられる。万葉編纂者が誰であるか、不明であるが、人麿の友人の一人だったことに相違ない。万葉編者は人麿が流人であるにもかかわらず、題詞に「朝臣人麿」と官位を使い、労り、敬意を示す。ここには編者の人麿への親愛が読み取れる。

流された「讃岐」とは香川県讃岐ではない。「讃岐」は彦島に存在した九州天皇家の「讃岐」で、「石見」もまた島根県ではない。この「石見」も九州天皇家の「石見」で、苅田町である。

九州天皇家の「石見(苅田町)」は人麿の故郷だった。石見國風土記は人麿が「石見守」として故郷に錦を飾ったと伝えるが、その「石見」に今度は流人として戻された。文武朝廷のなんとむごい仕打ちであろうか。故郷に流人として戻された人麿はこの地に暮らしていた最初の妻と会うこともできずに死んだ。その最後を、石見國風土記は「東海の畔」と記しているが「東海」とは周防灘である。

人麿は彦島から苅田町に流された。その時、彦島から門司に渡り、門司から小倉北区を経て小倉南区に到る陸路を歩んだと思われる。途中の小倉南区の干潟の海が名高い「淡海」の海である。ここには九州天皇家随一の宮、「近江大津宮」があり、対岸にはまた名高い「吉野宮」が存在した。持統も人麿も「吉野宮」へ渡る時、干潟に潮が満ちるのを待って対岸へ渡った。そして夕方また潮が満ちるのを待ってこちらへ帰ってきた。朝と夕に船が海を渡ったのはこの自然現象の為である。

人麿が文武の代に再び流されてこの道を故郷へと歩んだ時、持統の奈良遷都後、そう長い年月が過ぎていたわけではない。だが、「近江大津宮」は誰も住まなくなってすでに廃墟と化していた。

近江の荒れたる都を過ぐる時 柿本朝臣人麿の作る歌

ささなみの 志賀の大わだ 淀むとも 昔の人に またも逢はめやも

九州天皇家の都、近江。近江の海は笹浪である。ここに「志賀」という港があった。淡海の海は干潟の海である。満潮にならないと船は出航できない。昔、持統天皇が大津宮におられた時は宮人は潮待ちのためこの港に集ったものだ。だが、今、志賀の港に潮が満ちてきて船が出航できるようになったのに、もうこの船着き場で船を待つ九州天皇家の人々は誰もいない。

親交を結んだ持統朝の人々と再び会うことはあるだろうか。いや、二度と会うことはないのだ。持統九州天皇家は奈良に遷り、「遠の朝庭」となってしまった。

